様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：２５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２９３６

研究課題名（和文）グローバル社会における英語プレゼンテーション能力育成に向けたWeb教授法の開発

研究課題名（英文）Development of Web-Based Teaching Methods for the English Presentation Training for the Global Society

研究代表者
杉村　藍（Sugimura, Ai）

岡山県立大学・情報工学部・教授

研究者番号：１０２９０１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、英語を用いた国際的な人材育成の一環として、大学生・大学院生が研究成果を世界に発信できる英語プレゼンテーション能力を身に着けることを目指し「プレゼンテーション学習支援システム」（以下、本システム）を開発した。
　本システムは、独自のWeb動的評価、プレゼン終了時評価、そしてコメント評価の3つのe-portfolio機能を搭載しており、大学院生を対象とした複数の授業に導入した。その際の学習履歴を分析することによりシステムを改良した他、研究成果を学会誌等において発表している。今後は本研究の成果を発展させ、さらに効果的なプレゼンテーション教授法、そして国際社会で活躍できる人材育成を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　グローバル社会において活躍できる英語プレゼンテーション能力を育成するために、プレゼンテーション学習支援システムを開発した。このシステムは我々が独自に開発したWeb動的評価など3つの評価機能を搭載し、授業内だけでなく授業外での自律学習も支援する。また、このシステムを導入した実験授業や履歴情報の分析に基づき、教授法開発を行った。履歴情報の分析を通して、高コンテクスト文化の影響が窺われたため、この点については今後の課題として探求したい。なお、本研究で開発したシステムやWeb教授法は広く公表し、大学生や大学院生が専門的な研究活動をする上で、世界を視野に入れて研究結果を発表する支援に役立てたい。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed at helping university and graduate students acquire presentation skills so that they can deliver their research achievements effectively in English. To accomplish our goals, we have developed the Presentation Support System, which installed three-types of bespoke e-portfolio devices, namely, Online Evaluation, Post-Presentation Evaluation, and Comments. The system has been introduced to several graduate courses. The system has helped students improve their presentation skills. Some of them were successful in making and delivering presentations at international conferences. Based on the analyses of various information provided by the system, we published our findings on journals and we further improved the system. We are planning to expand our research and we would like to contribute in fostering students who can play an active role in the international community through the development of effective didactics for presentation.

研究分野：英語教育、英文学

キーワード：Web英語教授法　プレゼンテーション　ピアレビュー　e-portfolio

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

急速なグローバル化の進展に伴い、世界共通語としての英語の必要性がますます高まっている。学術研究の分野も例外ではない。研究成果を日本語で発表した場合と英語で発表した場合で、受け取る側の人数は大幅に違ってくる。世界への発信力という点で、英語を使用言語とすることは非常に重要な要素になる。

文部科学省は、英語教育改革の背景として、グローバル化が進展する中で国際共通語としての英語力の向上を日本の将来にとって極めて重要なものと位置づけ、特にコミュニケーション能力の育成を急ぐべきだとしている。日本の英語教育は、高校受験、大学受験に向けた受験対策が主流を占める時期が長く続いた。その後、社会や経済の国際化が急速に進んだことにより、それまでの「試験で高得点を取るための英語」から、「日常生活や仕事の現場で使える英語」を目指す動きが生まれて久しい。1989 年には、当時の文部省により新しい目標として「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が学習指導要領に盛り込まれ、「オーラルコミュニケーション」科目が新設された。(1) 2003 年には、文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定し、国際的共通語としての英語を用いたコミュニケーション能力を身に着けることが不可欠であると訴えている。(2) 国際化社会において、情報を入手、理解するだけでなく、発信する英語力が求められるようになってきた。

単に英語を習得するだけでなく、自分の考えや多様な情報を発信するという、積極的なコミュニケーションが取れる人材の育成を目指した英語教育が必要とされたことから、小学校での外国語活動ではすでにコミュニケーション能力の向上に力点を置いているが、一方で大学生、大学院生にとっては、国際レベルの活動に必要な高度な英語コミュニケーション能力を身に着けることはすぐにも取り組まなければならない課題である。

大学では教養科目等で英語を学び一定程度の英語力を有していながら、それを実践的な英会話やプレゼンテーションへとつなげる段階でギャップを感じている者は多い。これは、すでに培ってきた英語力だけではなく、それを基にプレゼンテーション能力を高めるためのトレーニングが別途必要であることを物語っている。そこで本研究では、効果的なトレーニングのために授業内で利用するだけでなく、授業外でも個別練習に利用可能な Web システムの導入が有効であると考えた。

(1) 鳥飼玖美子：“日本人と英語（１）：慢性的英語教育改革が招いた危機”、https://www.nippon.com/ja/currents/d00412/?pnum=1.
(2) 文部科学省、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画、平成 15 年 3 月.

２．研究の目的

本研究では、英語プレゼンテーション実践指導に特化したシステムを開発し、そのシステムを活用して効果的な英語プレゼンテーション教授法を開発することを目的とした。英語をはじめとする外国語の習得においては授業時間に留まらず授業外でも日常的に繰り返し学習することでその言語に「慣れる」というプロセスが欠かせない。在宅など授業外での学習をサポートする体制を整えるため、e-portfolio 評価に基づく自律型学習に向けた学習指導法を並行して開発することとした。

また、授業内での実践的な指導においては、発声法や発話のスピード、発音、アクセント、イントネーション、スライドとの連動など、プレゼンテーションの流れに沿って動的に変化する要素を評価するために、独自のプレゼンテーション評価法を開発することとした。

そしてプレゼンテーション教授法を開発する目的で、それらの仕組みを実際の授業に導入して実践実験授業を実施する。こうした実践的な実験結果の分析に基づき、教授者は基礎的な英語力で補充が必要な要素の確認、そして学生に対して効果が期待できる要素に重点を置いた指導が実施できる。

一方、個々の学習者は、授業外で教授者がその場にいない場合でも、システムを利用して個人でも、また他の受講者とでも peer review によって自律型学習を継続することができる。

最終的には、本研究で開発したシステムや Web 教授法を利用し、大学生や大学院生が世界を視野に入れて研究結果を発表する支援を行うことを目指している。

３．研究の方法

日本人が実践的な英会話を苦手とする背景としては、英語と日本語の根本的な言語構造の違いや、調音の難しさといった音声学上の問題、日本人が抱える文化的・心理的な障壁などが指摘されている。それらを克服する上で、学習者主体の繰り返し学習は重要である。そのため、我々がすでに科研費等により開発した英文法 Web 学習支援システムと、英語 4 技能習得を目指した総合英語 Web 学習支援システムを活用し、英語の基礎力拡充を図った。

そして、本研究の要となるプレゼンテーション学習支援システム（以下、本システム）に関しては、自律型学習と振り返り学習を組み込んだプレゼンテーション学習機能および e-portfolio

機能の設計開発を行なった。また、システムの運用に当たっては、最近は国家的組織によるインターネット破壊行為が増加しており、安全かつ円滑な実験環境を維持するために、常に最新の強固なセキュリティ機能で管理されているネットワーク管理専門企業のリースサーバーを使用した。

開発した本システムは、複数の大学院授業に導入し実験授業を実施した。e-portfolio 機能によって学習情報を日常的にモニターし、そのデータを教授者が学生の積極的な自律型学習を支援する教授法開発に利用した。また学生がその時その場で必要な学習情報を想定・確認しながら、教材や授業方法の修正およびシステムの改良を繰り返し実施した。

授業方法の修正・改善において特に取り組んだのは、評価方法である。英語プレゼンテーション能力を高めるためには、英語力とプレゼンテーション・スキルの両方を鍛える必要があり、繰り返し練習が欠かせない。効果的な練習を行うためには、発表者自身が自分のプレゼンテーションの長所と短所を理解し、練習が必要な部分をしっかりと把握する必要がある。発表者自身も冷静に自己評価できる判断力を身につけ、さらに他者からの客観的なフィードバックを受けることができれば、効果的な実践練習につなげることができる。

本研究では、新たな評価方法として次の 2 点を試みた。まず一つは、プレゼンテーションのような実技を評価する方法として、従来の知的テストとは異なる評価基準を作成した。そのために、パフォーマンスの質を評価するためのルーブリック評価法 (3) を参考にした。ルーブリック評価は主に指導者が評価するための基準であるが、本評価法では発表者本人および聴衆役の学生が評価した結果を学生同士でピアレビューすることを目的にしている。そしてもう一つは、その評価法に基づいて 3 種類の異なる評価機能を独自に開発したことである。

これらを搭載した本システム用をいて実験授業を行い、学習者の履歴情報や学習実験結果の分析に基づき、プレゼンテーション教授法の開発を行った。

(3) Stevens, Dannelle D. & Levi, Antonia J. “Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning”. Sterling, VA: Stylus Publishing (2013).

４．研究成果

グローバル社会において活躍できる英語プレゼンテーション能力を育成するために、我々は本システムを開発した。そのシステムを授業に導入し、実験授業や履歴情報の分析に基づき、教授法開発を行った。

本システムでは、教授者だけでなく発表者と聴衆（学生）、両方からの評価やフィードバックを採取しそれを練習につなげるために、利用するタイミングや内容によって 3 種類の評価方法を搭載している。それぞれ、Web 動的評価、終了時評価、コメント評価である。

Web 動的評価は我々が独自に開発した評価機能であり、動画を利用する。Hawke & Whittier も指摘しているように、ビデオを使った評価は発表者が自分をより客観的に見ることができるため、プレゼンテーションを改善するための最も有効な方法の一つである。(4) 本研究では、それに加えてプレゼンテーションと同期しながら評価する仕組みと、動画に同期させて評価結果を表示する仕組みを構築した。右図は Web 動的評価の動画再生画面である。

Web 動的評価では、発表者がプレゼンテーションしている様子をビデオカメラで録画し、それと同時進行で教授者と他の学生が評価を行なう。プレゼンテーションと同期を取って所定の評価項目をその都度評価するため、発表者は自分のプレゼンテーションのどの部分がどの評価領域において評価が高い、あるいは低いかをピンポイントで確認することができる。Web 動的評価結果は、動画再生時にプレゼンテーションの動画と同期して表示される他に、評価区分、評価項目ごとに合計した数字も集計表として表示される。

(4) Philip Hawke and Robert F. Whittier: “日本人研究者のための絶対できる英語プレゼンテーション”、羊土社、東京　(2013).

終了時評価はプレゼンテーションが終わった後、全体を通しての仕上がりを評価するものである。Web 動的評価の評価項目とは異なる要素を評価したい時、またはプレゼンテーション全体を対象とした評価をする際に利用する。Web 動的評価の評価項目がどのようなプレゼンテーションにも汎用的に利用可能であるのに対し、この終了時評価は、授業内容や注意したい評価内容に合わせて教授者がテーマに沿った評価項目を自由に設定できるのが特徴である。終了時評価では、発表者も自分のパフォーマンスの振り返りとして自己評価を入力する。

3 つ目の評価方法は、自由記述によるコメント評価である。これは、Web 動的評価や終了時評価の評価項目とは異なる着眼点の指摘をすくい取るためのものである。すでに述べた 2 つの評価法は、数の多さで重要度を測ることができる。その一方で、数としては少なくとも、プレゼンテーションを成立させる上で重要な指摘もあり得る。クリックの数では測れない質的な評価を、

この「コメント評価」で採取する。

何を評価するかは、発表者が何に注意し改善すればそのプレゼンテーションがより良くなるかというパフォーマンスの出来に直結する。また、個々の発表者が抱える課題もそれぞれに異なるため、何を対象として評価するか、評価項目の設定には慎重な検討が必要になる。以上 3 種類の評価結果は履歴情報として蓄積され、発表者や教員が必要に応じて閲覧することができる。

本システムを用いた実験授業の成果は、国内外の学会で公表して広く専門家や異分野の研究者の意見を求めた。また、完成した本システムは研究代表者の Web ページ(https://www.sugimura-laboratory.com/)で公開しており、多くの機関での活用を期待する。

コロナ禍以降、国内外を問わず対面での学会が延期または中止される一方で、オンラインシステムを用いた学会が急増したことにより、従来のように海外の開催地まで時間と費用を費やして渡航する必要なく、自国に居ながら国際学会に参加できるようになり、物理的な面で国際学会参加のハードルは劇的に下がった。国際学会がより参加しやすくなるのに比例し、それに向けた英語力やプレゼンテーション力を身に着ける必要性はさらに増している。

本研究では、プレゼンテーションと同時進行で教員とピアによって評価される Web 動的評価という独自に開発した評価システムと、自己の振り返りも含めた、従来から実施されているプレゼンテーション終了時における評価、そして計数的に評価できないコメント評価という 3 つの評価法を採用した。その結果、Web 動的評価では発表者のプレゼンテーションの流れに沿ってその時々におけるきめ細やかな評価結果が得られ、それ以外の評価法では発表者のプレゼンテーションの総括的な評価が得られた。そして複数年における実践授業では、多様な評価内容を参考にした授業外における自律学習も相俟って、各発表者は次のプレゼンテーションにそれらの評価結果を反映させることにより、毎回改善していく傾向がみられた。

そして、本研究では、英語力が高いにもかかわらず英語で十分に自分の意見を表現することを控える「高コンテクスト」文化に関する課題も浮かび上がってきた。実践授業のプレゼンテーションでは、英語力とは別に日本文化特有の「暗黙の理解」による説明不足や「周りを意識する」ことでスクリーンの内容に集中しすぎる傾向などが、Web 動的評価の分析結果から明らかになった。今後は、Web 動的評価と終了時評価を効果的に組み合わせることで「高コンテクスト」に対する効果的な指導法の開発に取り組みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計26件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Ai Sugimura, Saori Takeoka and Eric A. Des Marais	４．巻 8
２．論文標題 Combining In-class and Out-of-class Practices in a Hybrid Class: Action Research of the Presentation Support System for Developing English Presentation Skills.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JACET International Convention Selected Papers	６．最初と最後の頁 173-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 箕浦恵美子、武岡さおり、廖宸一	４．巻 68
２．論文標題 技能学習における振り返りと学修成果との関係	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋女子大学 紀要　家政・自然編	６．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ai Sugimura, Saori Takeoka and Eric Des Marais	４．巻 60
２．論文標題 Combining In-class and Out-of-class Practices in a Hybrid Class: A Descriptive Study of the Presentation Support System for Developing English Presentation Skills	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The JACET International Convention Proceedings: The JACET 60th Commemorative International Convention (Online 2021)	６．最初と最後の頁 87-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 杉村 藍	４．巻 9
２．論文標題 Webシステムを用いた英語プレゼンテーションの評価法研究(3)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村 藍、箕浦恵美子、武岡さおり	4．巻 9
2．論文標題 オンライン英語学習システムの公開に向けて―英語教育の視点から―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武岡 さおり、杉村 藍、箕浦 恵美子	4．巻 9
2．論文標題 オンライン英語学習システムの機能拡張に向けた検討－習熟度判定を伴う各学習システムの実現に向けて－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箕浦 恵美子、武岡 さおり、杉村 藍	4．巻 9
2．論文標題 指導者が使いやすい画面の提案－オンライン学習における多様な学習指導法に向けて－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武岡 さおり	4．巻 9
2．論文標題 オンライン英語学習システムを活用した学習方法の検討	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村　藍	4．巻 8
2．論文標題 Web システムを用いた英語プレゼンテーションの評価法研究(2)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村　藍、武岡さおり	4．巻 8
2．論文標題 英語プレゼンテーション指導法の開発に向けて－ Web システムの導入－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村藍	4．巻 第7号
2．論文標題 Webシステムを用いた英語プレゼンテーションの評価法研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村藍	4．巻 第7号
2．論文標題 英語プレゼンテーション指導法開発に向けた取り組み―多様な練習方法の活用を通して―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 19-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武岡さおり、杉村藍	4．巻 第7号
2．論文標題 英文法Webシステムの個人利用に向けた取り組み	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箕浦恵美子、武岡さおり、廖宸一	4．巻 第43巻
2．論文標題 学習履歴情報の提示が持続的な学習に与える効果	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本教育工学会 日本工学会論文誌	6．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jjet.S43028	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 箕浦恵美子、武岡さおり、廖宸一	4．巻 第66号
2．論文標題 技能学習を支援する学習指導法の検討 －学習に対する姿勢との関連性－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 名古屋女子大学 紀要 家政・自然編	6．最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉村　藍、武岡さおり	4．巻 6
2．論文標題 学習履歴に基づく効果的なフィードバックに向けて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武岡さおり、杉村　藍	４．巻 6
２．論文標題 英文法Web学習支援システムにおける教授者への学習履歴の提供	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉村　藍	４．巻 6
２．論文標題 Webシステムを利用した英語プレゼンテーション能力の育成	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 23-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武岡さおり	４．巻 6
２．論文標題 個人利用に向けた英文法Web 学習支援システム改良の検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 19-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ai Sugimura, Eric Des Marais, Judith Mikami	４．巻 第3巻第1号
２．論文標題 Open Voice: Incorporating Active Learning to Increase English Language Learner Output	５．発行年 2019年
３．雑誌名 岡山県立大学教育研究紀要	６．最初と最後の頁 3.1-3.9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 箕浦恵美子、武岡さおり、廖宸一	４．巻 65
２．論文標題 持続的な技能学習を支援する学習指導法の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 名古屋女子大学 紀要　家政・自然編	６．最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉村　藍、武岡さおり、尾崎正弘	４．巻 5
２．論文標題 紙テキストとWeb 学習を融合した教授法の試み	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武岡さおり、杉村　藍、尾崎正弘	４．巻 5
２．論文標題 英文法Web 学習支援システムの取り組み―現状の取り組みと今後の課題―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武岡さおり、杉村　藍、尾崎正弘	４．巻 5
２．論文標題 下位習熟度で停滞する学習者に対する出題方法の検討	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Web実践教育研究会報告	６．最初と最後の頁 19-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村　藍	4．巻 5
2．論文標題 英語プレゼンテーション能力育成への取り組み―Web システム導入に向けて―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾崎正弘、杉村　藍	4．巻 5
2．論文標題 Web 著作活動を考慮した教材作成の提案―英語教材の作成とe ポートフォリオ活用の試み―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Web実践教育研究会報告	6．最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 杉村藍
2．発表標題 英語スピーキング学習を支援する教授法の開発に向けた学習モデルの構築（その2）
3．学会等名 OPUフォーラム2019
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

プレゼンテーション学習支援システム
https://presen.hccp-gumto-lab.com/

英語教育全般・オンライン英語学習支援そして英語学習指導法
https://www.sugimura-laboratory.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武岡　さおり (Takeoka Saori) (10413288)	名古屋女子大学短期大学部・その他部局等・講師 (43934)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	尾崎　正弘 (Ozaki Masahiro)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関